研究会報告：

第 1 回イスラム思想研究会発表報告

（2020 年 12 月 21 日，オンライン）

14 世紀十二イマーム派イマーム論の変容

――『二千の書』の重要性――

西山　尚希
Naoki NISHIYAMA

2020 年 12 月 21 日に「第 1 回イスラム思想研究会」がオンラインで開催された。報告者は，ファフルルムハッキキーン・ヒッリー（Fakhr al-Muḥaqqiqīn al-Ḥillī, 1369 年没），およびその父であるアッラーマ・ヒッリー（al-ʾAllāma al-Ḥillī, 1325 年没）の共著とされる『二千の書（*Kitāb al-alfayn*）』に焦点をあて，そこで展開されたイマーム論に，スーフィズムやイルファーンなど，神秘主義の理論を応用した形跡がみられるということついて述べた。

十二イマーム派のイマーム論は，サファヴィー朝期に，ムッラー・サドラー（Mullā al-Ṣadrā, 1640 年没）などに代表されるウラマーたちが神秘主義的要素を取り入れることで発展したことは広く知られていることである。この思想潮流の先駆者として 14 世紀のウラマーであるハイダル・アームリー（Ḥaydar al-Āmulī, 1385 年没）が挙げられることが多い。しかし 13 世紀バハレーンをはじめ，アームリーに先行してイマーム論に神秘主義の理論を取り入れようとした思想家の存在が指摘されていることから，彼がこの思想潮流のはじまりであるとは言えない。ファフルルムハッキキーンの父であり，彼が師事した人物でもあるアッラーマは，イルハーン朝期の十二イマーム派を代表するウラマーであり，ブワイフ朝期に発展した思弁神学を継承した人物とされる。また一方でファフルルムハッキキーンはアームリーの師として直接の影響関係があったことを考えると，彼の思想についての研究は未だほとんど行われていないものの，思想史的重要性は決して少なくないと言えよう。

本発表では，アームリーがファフルルムハッキキーンに師事するよりも前である 1326 年に成立したとされる『二千の書』の前半部分を基に，イマームが有する特別な性質である無謬性（ʾisma）が禁欲（zuhd）と結びつけて解説されている点，イマームが人々の霊魂の修養における師として機能するとする見解，イマームは全てのものに神を見出すことで間違いや罪から免れているとする見解を指摘した。

十二イマーム派の古典的なイマーム論についての研究は，ブワイフ朝期にムウタズィラ派や

アシュアリー派との論争の中で発達した思弁神学的なものについて，あるいはサファヴィー朝期に発展した神秘主義の要素が多くみられるものについては比較的多く研究されている。しかし両者の思想潮流は大きく性質を異にするにもかかわらず，その転換期となったであろうイルハーン朝期からサファヴィー朝初期にかけてのイマーム論の変遷については，未だ明らかになっていないものが多い。イマーム論の変遷を分析するにあたって，後代のウラマーからも参照されたアームリーのイマーム論を念頭に，当時の十二イマーム派ウラマーたちの思想的影響関係を明らかにすることが，今後求められるだろう。

(東京大学大学院人文社会系研究科修士課程／
Master’s Student, Graduate School of Humanities and Sociology,
The University of Tokyo)